名古屋の「盛り場」大須

都市の民俗は盛り場の存在を抜きにしては語れない。都市に住む人々は農業や漁業とは異なり、自然と関わりを持たない仕事に従事してきた。そのため季節の行事の中にハレとケの区別をつけることが難しく、日常的な仕事の継続、すなわちケの状態が継続することで、「気」が枯れたケガレの状況を生み出しやすかった。ケガレは都市の人々を鬱屈させる。そうした状況から立ち直るためには自らをハレの状況に置くことが必要になる。その時、恒常的にハレの状況を提供してくれたのが盛り場であった。この意味で、都市における盛り場の持つ役割はきわめて重要なのである。

「大須」と通称される現在の名古屋市中区大須 2 丁目、3 丁目界隈の盛り場は、名古屋の歴史とともに発展してきた。江戸時代、徳川家康は西国大名からの守りを固めるため、熱田台地(名古屋台地)の北縁に名古屋城を建設し、当時尾張の中心であった清須から人々を集団移転させて城下町の整備を始めた。この時、城下町の東端と南端には寺町が作られる。このうち、南端の「南寺町」には宝生院、七寺、東掛所(東本願寺別院)、西掛所(西本願寺別院)といった大寺院や、尾張の修験頭である清寿院が置かれた。この中で、特に大須観音と呼びならわされた宝生院は、庶民の絶大な信仰を集めることになった。

図4―2　現在の大須・道路の通称と旧跡
(名古屋タイムズ「大須新地図」(昭和27年)及び『裏門前町誌』を参考に作成)

大須には広大な境内を持つ大寺院が多かったことから、やがてその地は芝居や興行の場として利用されることになる。このように、寺社町が盛り場として発展するのは都市の特徴であり、それは東京の浅草、大阪の千日前などにも共通する。大須は地理的に見れば名古屋城下町の南の端であるが、その中心を走る本町通は東海道の宮宿に通じ、その途中からは佐屋街道が分かれるなど交通至便な土地であった。こうしたことから、元禄から享保の頃(17 世紀末から 18 世紀半ば)にかけ、大須は名古屋一の盛り場となっていった。大須の周囲を見渡すと、その北には若宮八幡宮、南には東掛所があり、どちらにも芝居小屋が建てられていた。この二つと大須の清寿院芝居は、名古屋を代表する芝居小屋となってゆく。東掛所の周囲には広見と呼ばれた広場があり、西広見や東広見といった空間には見世物小屋や食べ物の露店が並び、彼岸ともなれば市中だけではなく近隣在郷からの人々が集まった。江戸時代の盛り場は、こうして寺社境内地を線で結ぶことによって広がっていったのである。

＊『愛知県史』別編　民俗 1 総説から

(2017 年 11 月 24 日)